

「卒業」の季節に。

本田 和子



春、三月、子どもらが巣立っていく。「卒業」とか「進級」とかの名のもとに、彼らはいままででのステージを後にし、新しい段階へと歩を進めるのだ。

「よろこばれると済まなくなる。礼をいわれると気恥ずかしくなる。うれしさと目出度さに上気させられるような、三月末の賑やかさと、はなやかさとの後に、子どもには知らせずに、そっと独りで詫びたい心が残る。」これは、倉橋惣三の美しい三月のことばであった。そして、こんな想いの片鱗は、現

在の保育者たちの心のどこかには、宿り続けているに相違ない。保育現場での幼い人たちとの出会いと別れは、こうした、幾分情緒的に過ぎるかと思えるほどの心の柔かさに、その多くを依存しているだろうからだ。

しかし、ここでは、こんなにも牧歌的で美しい心の情景をとりあえずは脇に置いて、いま少しクールに、三月の別れなるものを把え返してみよう。花だよりも聞かれる頃には、子どもらが一斉に業を終え

て、新しいステージへと上っていくとは、考えてみれば不可思議なしきたりではないだろうか。満六歳になったから幼稚園にはならない。あるいは、

満四歳だから、最年少の組にはとどまれない……。

もしかしたら、彼らは現在の級にいたいかも知れないのだし、なかには、一日も早く小学校へ行きたくてうずうずしている子どももいよう。こうした本人の意欲だけではなく、第三者的な観点からも、いま少しゆっくりと園生活を体験させたい子どももあり、また、他方では、早々と進学させてみたい子どももあるに相違ない。にもかかわらず、三月は、これらのすべてを無視して、子どもたちを「進学」、もしくは「進級」という名のもとに、いや応なく次の段階へと押し進める季節なのだ。このとき、私どもは気付かされよう、三月を彩るくさぐさの行事は、保育現場とはかかわりなく、子どもたちを公の制度に組み込んでいくための、文化的装置に他ならないということに……。



教育が年齢と不可分に結び付き、結果として、子どもらが年齢別集団にまとめられて階層化されたことは、近代学校制度をしるしづける一つの特色とされている。私どもがいま、その自明性を疑おうともしない「学年制」や「学級制」を出現させたのは、一七、八世紀のヨーロッパ社会だった。いまさらという批判を恐れず、Ph・アリエスをあえて引用するなら、近代学校は次のように定義される。すなわち、「年齢と対応する制度」であり、「規律という心性に支えられている」と……。年齢毎に学習段階を設定し、一定年齢の入退学や進級を制度化するのは、極めて分類好きで規律好みの心性に依拠している。こうして定着したのが近代学校であり、そこに子どもを通わせることを当然と考えるようになったのが、近代人ということになるか。結果として、

近代社会で、子どもたちは「学校」と不可分になり、「学年」や「学級」によってその生を区切られることになった。私どもの時代は、「学校」という学びの場を、子どもたち一人一人の必要性に応えるにまじて、「年齢」という制度によって彼らを進退させる、社会的・文化的装置へと変貌させたのである。



聖職者を養成する宗教学校に代表されるヨーロッパ中の学校は、入学年齢の上限を設けこそすれ、それ以上の細かな制限はなかったとされている。これ以上の高齢者は、勉強しても聖職に着き得ないというラインだけが示されていたということだ。しかも、ルネッサンス期の人文学者たちの生涯教養主義にも影響されて、年齢的な制限や区分などは、殆んど重視されていなかったらしい。従って、「学校」

が大人をしめ出したのも、近代社会の出来事だったのだ。現在は、再び、生涯教育のかけ声が盛んになってきている。しかし、カルチャー・センターの活況に比して、いわゆる正式の学校教育が成人向けに開かれたものとなりにくいのは、こうした近代化路線の帰結というべきかも知れない。

近代社会が、「効率」という新しい価値を手に入れたとき、学校教育も、効率的に整備されざるを得なかった。同年齢集団を一つの単位とし、教授内容に順序性を導入して階級状に並べ、年齢集団と教授内容の単位とを対応させる。いわゆる「難易度に従って配列された系統的プログラム」の出現であり、プログラムに則った学習の展開である。そして、それらを遵守させるべく「校則」という名の規律が全体を覆う。系統的に、規則正しく、下から上へ……。これこそが、学習効率を上げ得るかたちとして、選択されたのであった。

年齢と教育が不可分となり、しかも、学習が、下

から上へと階段状に遂行されるものと化したとき、子どもたちは、「時間」に支配される存在と化した。しかも、不断に進行を続ける非可逆的な「時計の時間」の……。

中世社会で、人々は、教会の塔から打ち鳴らされるミサを告げる鐘の音で、日常の時を区切っていた。しかし、近代社会では、人々は、商人が広場に建設した時計塔の時計によって、時間を測るようになる。世界中に広がった市場社会で、時間は貨幣で換算可能な財貨と化し、文字通り「時は金なり」となったのである。商品を積んだ船の入港が一時間遅れるならば、それが直ちに市場での利益に反影される。少しでも早く商品を手に入れ、他に先んじて市場に放つことが必要な時代の到来……。時間が富と結び付き、しかもスピードがその利潤を決定する。それも、一度遅れてしまえば、容易に取り戻し得ぬ非可逆性。近代という時代は、こうして、時計の刻む秒単位の時間に支配されることになった。

以上は、中世史学者ル・ゴフの見解である。そして、この時間の支配は、学校教育を覆い、それと不可分に結び付けられた子どもたちをも絡め取ってしまったのだ。子どもらは、時計の進行とともに成長し、決して後戻りすることはない。そう、四歳になつてしまった子どもは、いま一度三歳をやり直すことは出来ないのだ。

私どもは、「かけがえない幼児期」とか、取り返しの利かない「教育適齢期」という言い方を好む。そして、それが、子どもを尊重する美しい観念であることを信じて疑わない。しかし、考えてみれば、それもまた「近代的時間意識の所産」に他なるまい。子どもの生の歩みが、「成長」という名のものと、市場をころがる商品の利潤と同じ目盛りで測られ始めたのだから。

世の中には、必ずしも順境とは言い難い幼児期を過ごしても、なおかつ、立派に成人した人は少なくない。ということとは、これらの人々は、取り返しの

出来る人生を歩んだということになる。どこかでそのマイナスを取り返したのだ。しかし、こうした人々は例外と片付けられ、子どもたちの上には、非可逆的な時計の時間に支配された成長観が、べったりと貼り付けられてしまった。その上に、彼らの一瞬一瞬を大切にすることが、何故か子どもたちの現在に奉仕せず、絶えず未来へ未来へと引き裂かれることになった。すなわち、いまやっておかないと将来に禍いを招くというかたちで……。子どもたちが、近代的な経過する時間の支配下に入ったことで、彼らの「現在」は、奪われてしまったとすら言うことが出来そうである。



樋口一葉の『たけくらべ』を、子どもものの時間の封じこめられた作品と解説して、その評論に、『子どもたちの時間』と命名したのは、先年物故された国

文学者の前田愛氏であった。「私たちは、古いアルバムの色褪せた写真から失われた記憶の一齣一齣をとりもどすように、『たけくらべ』の信如や美登利に導かれて、めいめいの子ども時間を手ぐりよせようとすると、書き始められた氏の文章は、その最終部分を次のように結んでいた。「大音寺前を賑わわせていた子どもの世界を跡かたもなく崩してしまった見えない力の正体が、『近代』そのものであったとすれば、それは『たけくらべ』に導かれて子ども時間へと逆行する旅を終えたばかりの私たち自身が引き受けなければならない原罪なのである」と……。

『たけくらべ』の主人公たちは、立身出世やら将来の設計やらとはおよそ無縁に、他愛もなく遊び呆けていたのだ。彼らの現在には、ただひたすらに彼らの遊びのために奉仕させられる。学校教育の普及と、子どもたちをそのなかに組み込むべく、勤儉努力・克己勉勵が推奨され、二宮金次郎の銅像が、小

学校の校庭を飾る。こんな時代と無関係に、「十六むさし」や「きしゃごはじき」など、江戸以来の伝統的な遊びに現を抜かず美登利たち……。作品のなかの彼らの姿が、切ないまでに輝いて見えるのは、姿を消しつつあったものたちの残照であろうか。

「近代化」あるいは「進歩」などと名付けられた時間の奔流は、こうして遊び呆ける子どもたちの時間を、跡かたもなく流し去ってしまったのだから。

子どもらの遊びの喪失が問題とされている。しかし、彼らの時間を、「遊び」とは逆の色合いへと染め変える力は、既に一〇〇年の以前から、着々と働き始めていたのだ。とすれば、私どももまた、前田氏に倣って、急ぎ過ぎた近代化を省み、大人としてその償いを考えねばならないのかも知れぬ。子どもたちが、自身の欲求や自身の必要性とは無縁に、近代というしがらみに巻き込まれ、スピードと規律という奇妙な尺度によって絡め取られていることは確かなのだから。



三月、卒業と進級の季節。子どもたちが、一斉に階級を一つ上る。この見慣れた光景に、いま改めて歴史の光を当ててみた。そのとき、浮かび上ってきたのは、これらもまた、子どもたちから牧歌的な彼らの時間を奪い取ることで成立しているという経緯だった。すなわち、「子どもたちの近代」の無残な結末の一つ……。そして、私どもは気付かされよう。いま自明とされ、問うことすら忘れられている多くのことがらが、考え直しみつめ直さるべき課題として、改めての検討を要求しているということに……。もちろん、入退学にせよ、進級にせよ、制度化されたあれこれを改めることは、それほど容易なことではない。しかし、少なくとも、そうした制度化が、必ずしも「子どものため」のものではなかったと知るとは、無益ではあるまいと思う。

(お茶の水女子大学)